

あを 5

2024



鷺の顔魚の顔とむきあへり

鷺の顔魚の顔とむきあへり

青蚓龜蛇

佐藤竹僊

玄関を出てゆく白帆麥の秋

玄関を出てゆく白帆麥の秋

五月集

坐・誹

佐藤 竹僊

一月は眞正面からやつてくる
 一月は正四面體だとおもふ
 踏青や命みことと命手を取りて
 走り根を杖のまたぎて木の芽風
 この家に鏡いちまい春の朝
 耕して美しき土櫻咲く



赤貝は虹にこもりて虹を吐き
 とんでとんで片喰ばかりしじみ蝶
 春雨に半死の輪ゴム輪をなさず
 しばらくは海をすすめり雪解川
 春かすみ餘生ばかりの動物園
 まんまるな榎櫃となれば餘世なり
 弘子女史朝寢のままのつもりなり
 中國製鼻毛カミソリ春うらら
 菜の花の動畫のなかに鳥鳴く
 春愁のやうな吐息よマヨネーズ
 ゴキブリがプラスチックを食べて春



花三分

須賀敏子

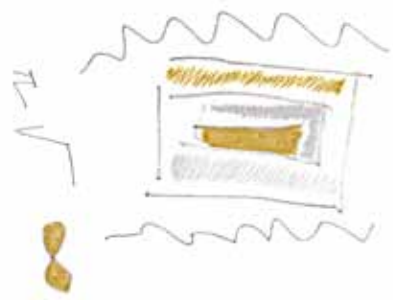
今余生乙女椿を見て思ふ
夏柑を今年も抱えきれぬ程
低山も登れば嬉し春の雲
源氏講座次回はミモザの降る頃に
角曲がる空き地一面花大根
花三分ぼんぼりばかり目立ちけり
伴走者「桜三分」と耳元へ
花荵待ちきれぬ人テント張り



桜祭り

都築繁子

さくら祭近しボンボリ続く道
花遅し盆栽市のミニ桜
麗らかやお猿の芸を背伸びして
落日や白木蓮のひかり合ふ
建物の壁面緑化春の風
出番なき大皿愛し黄水仙
春の雲歩道橋より車見る



水仙

長崎 桂子

水仙開花六年経てに驚異
風荒ぶ黄水仙数まし元氣
香りよき此の家の梅や皆見上ぐ
見上げゐて紅梅かをり笑みと笑み
目覚めにうかぶ夢のこと木木芽吹く
庭の隅あちこちみどり芽吹かな
東風つよし自宅の周り手をいれる
実南天すべて野鳥に食べられて
春告げる菜花おいしや感謝して
高熱二日予防注射に頓首を



少しだけ

森 なほ子

少しだけ気配りしあひ春炬燵
何もかもネットで済まし春炬燵
亀鳴いてラインの「。」は鳩にやる
天気図の古里の辺は春の雪
疾風や白梅ひと枝に耐へ
看板は「極真空手」辛夷咲く
神獣像噴く噴水の水温む
鳥帰る視界に山の無き暮らし



三月

赤座典子

三連の雪山見せし春の雲

春北風や増えてしまひぬ飲み薬

文鳥に灯早める菜種梅雨

艶やかな紫陽花の芽のつんつんと

強さが好き輝きが好き花ミモザ

レジの横慎ましやかに桜餅

黄砂とか寒暖差など立ち話

戦あり

秋川 泉

わがままにとほせんぼする春の夕

走り去る子の手の中に風信子

「きつとね」と指切りをする春の闇

見せ合うてとりかへてみる春シヨール

夢なのか待っていたよと初桜

密と咲くすみれは踏まれ戦あり

今年の花白々としてそこに咲く



モダンジャズ

七郎衛門吉保

地震嫌ひ雖今年も箱を出ず
三・一一浪江の町へ道遠し
雨に冴え濡れて行こふと山椒の芽
理科学ぶ早い芽出しの露の薹
残る雪遊ぶ男の子の尻ミット
雪解水少なに農婦思案顔
春愁や美容師の褒む白髪かな
卒業式母の着物のナフタリン
江戸越後上総も甲斐も花粉症
三月やモダンジャズ聴きモーニング



デモ

篠田純子

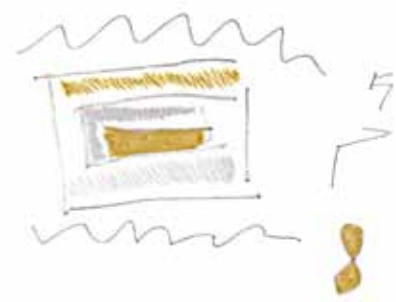
憲法改正反対のこゑ花粉飛ぶ
デモ隊の老人ばかりねこやなぎ
春埃国会通りへデモ曲る
「お金を入れて下さい」セルフレジ余寒
ゼレンスキー似の漢銀座に涅槃西風
萌え袖の短くなりて卒業す
銀巴里も盆栽店も春の雪
春疾風自転車ドミノの絡み合ふ



風の意味

篠田 大佳

戦った少年の傷雪解水
青梅行国分寺着うらけし
乳飲子とその母座してのどかなり
銀ぶらのランナー春風に恍惚
春風を受け風の意味悟る稚児
少年に戻る漫画春の水
桜ひとひら彼岸の墓の茶湯器へと
舟傾げ金杉橋の春暮れぬ
手を振るや手が春闇に消えるまで



昨年のわたしの一句

秋雨に濡れ真つ新たな横断旗

篠田大佳

家の近所にこども園ができたせいか、こども園の近くの十字路に横断旗が設置されました。実際にこどもが使っている様子を見たことがなく、旗入れは屑籠にされてしまっています。手垢もついていない真つ黄色の横断旗が物寂しい秋雨を弾いています。撥水して汚れることのない横断旗は、泥やタイヤ痕に汚れたアスファルトとは対照的です。

実千両隣は独り住まいなり

須賀敏子

あを二月号の句である。

隣人は物静かな男性で、会えば気さくに話の出来る方でした。

十二月自宅で亡くなられているのを、訪ねて来た友人に発見された。まだ七十歳。突然のことで、未だ心の整理ができていない。

秋收集

檻の中春の小川はさらさらと
コンビニに福豆の福売れ残り
遺歌集に留まる作者春寒し
春残響路上ライブを向く七人
図書館へ行きも帰りも梅の花
自転車に釣具一式日脚伸び
伐採の円い切口春日燦
雪搔や喜びと疲れ複雑
鬼は外お助けお願い豆を撒く
ハンドクリーム消した灯をまた付けて
朝食は和洋折衷寒卵
白湯注ぐ塩引の紅飯の上
月白く血管青し春の宵
年経ても可憐で元気木瓜の花

佐藤 竹僊
篠田 大佳

須賀 敏子
都築 繁子

長崎 桂子

森 なほ子

渡邊 京子

葉に一声花に一声シクラメン

赤座 典子

暮れ泥む空に紅梅吸はれゆく

仕事師のSLIMの憩ふ春満月

秋川 泉

「あかうさぎ」生きてゐたよと雪女

春の雪降りしきる夜のすべり台

七郎衛門吉保

シアターのロマンポルノや春一番

雪を掻くアルミシャベルのカリリカラッ

篠田 純子

緑濃き小鉤ふうの葉山椿

一口元宮の掠芽吹きけり

ひと月分の葉分包蛸蛸のひも

コレステロールに善悪のあり納税期

よく見れば終の枯葉は蓑虫なり

ほどけつつ絡む遺伝子春の風

喜孝抄



海面上昇



紅梅の疲れて梅を見てをりぬ

佐藤竹僊

紅梅を歩いて巡って、歩き疲れて腰を下ろしたら、そこにも梅が咲いていて、また見てしまっているという句意と読みます。歩いて見る梅と座って見る梅は、同じ梅でも趣が違います。言葉を省略したときの誤解の楽しさがあります。（大佳）

電柱の傾いでゐると蟬止る

佐藤竹僊

この句を初め写生句かと思った。こんな電柱を見ることもあるから。だが、何だか引つ掛かるのは「傾いでゐると」のせいだ。これは写生句ではなく、観察の報告でもなくて作者らしいユーモアの句ではないのでしょうか？ あまり真っ直ぐ突っ立ってないで少し傾いでみれば、蟬も来て止まるよと。（なほ子）

白き鷹据ゑて妙齡なる鷹匠

篠田純子

作者から聞いた話では女性の鷹匠が鷹を伴っている景ですが、鑑賞の核となるのは「妙齡」という言葉です。「妙齡」の意味を辞書に尋ねると、元々は若い女性のことを指すが、最近はやや行動が垢抜けた中年以上の女性のことも指すとあります。「据ゑて」の不安定な感じもあり原義の

若々しさを読みたいですが、この感覚が読者に共有されるのは、若さへの執着がなくなるであろう、未来の話になりそうです。（大佳）

初金比羅ベビーカーステラ屋の饒舌

篠田純子

純子さんは物識りだなとおもふ。江戸の域外で育った私と、下町で育った純子さんとは祭ごとへの経験値に雲泥の差がある。この句から私の体験したことのない縁日のざわめきが聞えてくる。「初金毘羅」は「二月十日、その年初めての金刀比羅宮の縁日、初十日ともいう」と歳時記に。俳句の基本リズムの五七五を外したことにより、縁日のざわめきを際立たせている。（喜孝）

熟年家族節も雑煮も各々に

篠田大佳

「熟年家族」は作者の造語だろうか。私にはあまり見かけない言葉に思えたが、意味はよくわかる。今の世に珍しくない。老親と熟年になった子供達が、それぞれ元日と言えども自分のペースを崩さず、好きな時におせちや雑煮を食べる。それも仕方ないことだが、それでも母のお節はなくてはならない我が家の味なのだ。（なほ子）

元日の夜「地震が治つたらまた遊べる？」

篠田大佳

今回の能登半島地震は一月一日十六時十分に発生した。大地震であった。悲惨な、無惨な映像

が元日の夕餉の茶の間のテレビに映し出された。

掲句はその日の夜の子供の会話を書き留めた作品。「地震が治ったら」と幼児らしい言葉である。子供は何時も天才である。三ヶ月も経ったがいまだに地震の痕は治ってゐない。(喜孝)

宝船うっかり夢を忘れけり

須賀敏子

今年こそ良い初夢を、と張り切つて、「宝船」をしっかり枕の下に。結果、この句のようなことになり今年も挫折する。何か良さそうな夢だったのだが。夢とは不思議に霞のように消えていくもの。まあすぐ忘れるほどの夢で良かったのかも。(なほ子)

被災地の能登に寒波の予報あり

須賀敏子

この句の眼目は「予報あり」。災害地が寒波にさらされてゐるのではなく、寒波の予報が出てゐると詠む作者。「寒波あり」と「寒波の予報あり」は表現は同じやうでも、表現の結果はだいぶ違ふと私には思へる。この下五の「予報あり」がこの句を成り立たせてゐると思つた。(喜孝)

露天湯や枯れ木の間より青き空

都築繁子

露天湯は暖かい季節よりやはり冬がいいですね。枝ばかりになった枯木の間に見える冬の青空、なんとも言えないしみじみした良さがあります。これが夏だと緑が繁つて暑苦しく、青空も熱気でムンムン湯上がりの汗まみれ、等々。露天湯は冬が最高、この句にあらためて思いました。(なほ子)

日めくりの格言楽し柚子香る

都築繁子

日めくりのあの小さな紙面にはたくさんさんの情報が詰め込まれてゐる。年月日はもちろんだが、旧暦、六曜等々。日めくりによつては名言、格言が記されてゐるものもある。日めくりの格言を読むのは楽しい。読んだからといってすぐ忘れるのだが。興が向くと今日の分では済まず、二三日先まで捲つて見てしまふ。「柚子香る」が上手い。古暦と新しい暦が並んでゐる短い季節の楽しみを確かに伝えてゐる。(喜孝)

日差し来るドドオンと落つる屋根の雪

長崎桂子

今年は東京にはほとんど積雪がなかったのですが、そちらはかなり降つたようですね。「ドドオン」最高です！雪国の屋根雪が落ちる音がまさにこれ。今まで誰もこう言えなかったのではないかと思います。(なほ子)

娘と歩む日は燦燦と初祓

長崎桂子

「初祓」は「初詣で社殿に上り神官。にお祓いをしてもらうこと」。初祓といふ季語を掲句で知つた。桂子さんの娘さんと神域を歩む嬉しげな誇らしげな姿を想起した。(喜孝)

題から察するに、作者はお正月にカリフォルニアに旅行したようです。様々な景を写真展示のように読んでみると、掲句に歩みを止めます。古塔の歴史、学舎の歴史、死との共生、冬青空の鮮やかさ、外の寒さ……。そういったイメージが浮かんできて、一枚の写真を深く鑑賞するように読みました。(大佳)

正月もあつけらかんとハンバーガー

森なほ子

正月に対する特に都会の日本人の伝習の変化はおどろくばかり。私の体験したささやかな事柄も怒涛のやうな変化の中で消えてゆく。いや乱れてゐるのかもしれないと思ひたい。たとへば正月の料理に限って見てもわかる。テレビでは歳末が近づくお節料理の広告で溢れかへる。昔は(私には昔ではないが)三が日は小売店、いやデパートも休業した。コンビニのない時代の話。子供たちはお年玉をもらつてもしばらくは使ふことができずにゐたものだ。本当にちよつと前の日本の話である。

掲句は、今の日本の正月光景の変化を「あつけらかんとハンバーグ」と詠んだ。おいしさうにマクドナルドを食べ歩きしながら楽しんでゐる。正月を違和感を持つてゐると鑑賞することも可能なくだが、この句は「カルフォルニア雑詠」として発表された内の一句。日本とアメリカの正月への温度差をハンバーガー一つで的確に表現された。

俳句は不思議な詩形だとおもつてゐる。掲句も最後は作られた場所、作られた時代、作った人が消えて五七五の言葉が立つてゐる。これが俳句の自然体。例へば芭蕉の発句も研究者がさまざま

まな面から考察をし一句が多面体の立姿をしてゐる。古池の句しかりである。もしかしたら芭蕉本人さえ産み落としたあとの自作を初意とは違ふ面を見つけて驚き喜んでゐたかもしれないと妄想する。俳句は言葉を尽くさぬ詩形ゆゑの魔力で人を惹き寄せてゐる。(喜孝)

何事も無かりしやうな寒日和

赤座典子

報道は毎日、重大事件を報じている。社会は大きな変動を迎えている。しかし、地球の目線から見れば大きな変化もなく、例年のような寒い中にも穏やかな冬の日である。こういうイメージを読みました。社会総体と実生活のギャップが大きい困惑を掲句から読みます。(大佳)

元日や曾遊の地に大地震

赤座典子

元日の夕方に発生した能登半島地震に驚き、かなしみ、詠まれた方が多かった。この句もそのうちの一句。この地震から三カ月いや四カ月も経たんとしてゐる。このやうな大災害の復興に携はる方は大変だとおもふが、傍からみてゐると遅々として進まぬやうに見えてしまふ。先日天皇皇后両陛下が再度被災地を訪ねられたとテレビが伝へてゐた。(喜孝)

初夢の大きな野望打ち捨てぬ

秋川 泉

見たい夢を計画して見たいという人々の願望は、装飾品や玩具など様々な形になって現れています。作者は、計画して良い夢を見たいという「野望」を「打ち捨てぬ」と、強い言葉で詠んでいます。大きな挫折感を想像しますが、元日の能登半島地震のショックが大きかったのか、その他の理由かは不明ですが、強い語彙を選択したことから、自らの欲を律するための挫折だったのかもしれない。（大佳）

元日の地震の長きに天仰ぐ

秋川 泉

「天を仰ぐ」は「空を見上げること」という意味。神に訴えるような仕草を表す。悲しい、ネガティブな心理状態。」とネット辞書にあった。「天仰ぐ」といふこの語彙は泉さんの心のすべて表現してゐる。このやうな大惨事を詠む内容の俳句に表現の上手い下手とかいふ鑑賞は不適切とおもふが、「地震の長きに天仰ぐ」は心に残るフレーズだ。（喜孝）

珠洲の七輪窯の崩れて寒威

七郎衛門吉保

掲句は背景情報が必要です。二〇二四年は能登半島地震から始まりました。おめでたい元日に起きた災厄に打ちひしがれる人が多く、「あを」でも能登半島地震のことが多く詠まれていま

す。珠洲は能登半島の先端に位置する地域で、特産の珪藻土で七輪を多く生産しているそうです。北國新聞のウェブ記事を読むと、ある七輪の工場では窯や建物が壊れるのは、今回の地震で三度目（二〇二二年、二三年、二四年）だそうです。記事は落胆する工場の社長の声を伝えており、先行きが不透明な様子が伝わってきます。（大佳）

宝船止まずの地震に帆を下ろす

七郎衛門吉保

七郎衛門さんは一句一句に工夫を凝らして俳句の中に自己を確立しようと努力をしてをられる。今回の能登半島地震に限らず、大地震の後は何度も余震が続く。宝船は一年に一度しか出航しない。来年こそはと期待すること大である。（喜孝）



あとがき

表紙

「一勇齋國芳」の「智勇六佳選」の中の八幡太郎源義家。

ある日、父が古道具屋から嬉しさうに抱へてきたボロボロな浮世絵。父が時間をかけて裏打ちをし鑑賞できるやうにしたものの一枚。ほかに梶原源太景季・源三位頼政・薩摩守平忠度・巨田持資入道源道灌・残りの一葉は清盛の末葉と分かるが判読不明。いかに痛んでいたか。浮世絵版画は裏打ちをしてしまつたら価値がなくなるのでご注意を。改めて眺めておて思ひ出したことがある。父は風を作つて子供に与えた。風の絵を目をつむつて思ひ出すと、波上の日の出、武者絵、だるまなどが浮んできた。よく揚がる風であった。半身不随になつてからリハビリを兼ねよく絵を描いてゐた。そんな父をこの一枚から思ひ出した。

短い文章 題「色」

——飯を食つていくか。

街のにぎやかさに釣られたように、伊之助はそう

思い、常磐町と松井町二丁目の角を左に曲がつた。一角に娼家が固まつている町だった。

そこまで歩いてくる間に、町の上に残つていた光は姿を消し、代わりに空が木苺の実のように黄ばみはじめていた。

（本所しぐれ町物語（消えた女）藤沢周平）
これだけの文字数で江戸の町の中に読者は抛りこまれ次の場面を期待する。映像に勝る文の働きである。

さて今回のお題は「色」です。よろしく願ひします。

喜孝

二〇二四年五月号

発行日 五月七日

発行所

〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三

サンハイツ石神井2 一階

電話

090 9828 4244

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／福井美佐子・ティリエイマ

会費 一〇〇〇〇円（送料共）／一年

ゆうちょ銀行（普）（店番018）4586402

佐藤 喜孝（サトウ ヨシタカ）